

King of Hobby アマチュア無線

機械工学科 2期生 中野 仁
JH3EUJ exJA8CZP

私は昭和45年に卒業して、関西の企業に就職、兵庫県に生活の場を移しました。その後は一貫して兵庫県で40年、サラリーマン生活を続け、3年半前に定年を迎え年金生活に入ってます。(後輩諸氏の年金サポートに感謝してます)

今の時代、給料大幅減で再雇用の選択肢もあったのですが、アフターリタイアは『自分のために時間を使いたい、趣味の世界に生きます』と大見栄を切って会社との縁を切りました。

その趣味とはアマチュア無線と山登りです、山登りは日本百名山完登をめざしてまだ道半ばですが、今回はアマチュア無線についてお話ししたいと思います。

私とアマチュア無線の出会いは高専の寮生活の時代までタイムスリップします。インターネットも携帯もない時代に居ながらにして遠隔の地と交信できるアマチュア無線の存在を知った時、新鮮な感動を覚えたのを今も鮮明に記憶しています。高専2年生の時、当時入門クラスの電話級アマチュア無線技士の資格を得た私は無謀にも寮でアマチュア無線局を開局しました。もちろん合法的な手続きに基づいてますが、おまへの声がラジオに入る、との苦情を何度か受けたものです。それでも私の電波が国内だけでなく海外まで飛んでいくというのはたまらない魅力で感動でした、どんどん無線に染まっていきました。

当時からアマチュア無線はKing of Hobbyと言われ、幅広い年齢層に支持されていました。知識階級の愛好者も多くそのような方と交信することで私も一人の人間として社会から認められているような自己満足がありました。

3年生の時、2級アマチュア無線技士の資格を取り、交信するだけでなく、無線機を自作したり、苫小牧の地域クラブに参加するなど、無線を軸に活動の幅を広げていきました。

無線の環境の激変は就職と共にやってきました。入社後は会社の独身寮に入りましたが、どう考えてもアンテナを設置するスペースもなく、無線をできるとは思えませんでした。それでも苫小牧で経験したあの感動が忘れられず、とりあえず関西のコールサインをもらおうと開局申請をしました。電波を出せる目処は全くありませんでしたが、数ヶ月の後、新しいコールサインは届きました。

大阪万博の行われた1970年のことです。

でも、ライセンスがあるのに電波を出せないのは更にストレスになりました。

これまた無謀にも最初のボーナスを全てつぎ込んで無線機を購入しました。

この時も電波を出す目処は全くなかったのですが、ライセンスがあり無線機もあるとなったら、もう前進あるのみです。寮の管理者の許可も受けず、テレビのアンテナのステーにしか見えないようなアンテナを張り、必要最低限の設備ですが電波を出せる環境を作ることができました。本当に細々ですが関西でアマチュア無線を再開できたのです。苫小牧での感動がよみがえりました。

仕事の合間の趣味で、費やす時間も限られていましたが、道は開かれました。

やがて結婚して社宅住まいとなっても細々ながら常にチャレンジは続きました。

今の家を建てたときも、学校とか病院が近いというのはこの次で、少々不便でもアンテナを建てるスペースを確保することを優先した程で家族からは白い目でした。アマチュア無線では現状維持は許されません、常に技術の向上を目指し、設備の改善、自己鍛練が求められます。時代の変化とともに、常にチャレンジを続けてきました。この頃アマチュアとしては最上級の第1級アマチュア無線技士の資格も取得しました。運用も今はプロ通信の世界からは姿を消したモールス通信による海外局との交信が主体になってきました。無線を通した人と人のつながりに魅せられ、アマチュア無線の奥深さを知れば知るほどのめり込んできました

そんなわけで定年を迎えた時もためらわず、趣味の世界を更に極めたいとの思いを貫きました。無線機の出力も国内では最高レベルの500wに変更しました。余談ですが現役時代、私は移動式クレーンの製造検査で労働局と接する機会が多くありましたが、この検査でも検査官は1人なのに、たかがアマチュア無線局の変更検査に主管省庁は違いますが、近畿総合通信局から3人もの検査官が我が家にやってきたのは驚きでした。

アマチュア無線では交信の後、交信証のカードを交換します。世界の1万局と交信して交信証を集めたアマチュア無線局に対して読売新聞社が世界一万局よみうりアワードという賞状を発行しています。1万局の中には世界の340カントリーのうち200カントリー以上を含み、更に90に分割されたゾーンのうち70以上を含むことが要求され、特定の国、地域に偏らずまんべんなく交信することが求められています。国内では最難関クラスの取得の難しいアワードといわれています。私はこのアワードを2月に申請し4月に受賞の連絡を受けました。正しくは受賞の審査に合格したのであって、受賞のアワードを受け取る授与式の予定は後日改めて連絡しますとのことで、連絡待ちの状態です。これまでの趣味の世界の活動がそれなりに評価されたものと喜んでいますが。授与式は東京の読売新聞本社で行われるのが通例でヨメさんと一緒に行こうと話しています。

最初にアマチュア無線を始めてから半世紀近い時間が経過してアマチュア無線の世界も時代とともに変化してきました。インターネット全盛の今、単にコミュニケーションの手段としてなら無線の出番はありません、しかし無線にしかない魅力がいまも依然として光り輝いているのです。それは人と人の繋がりで常に無線機を通じて繋がる先には生身の人間がいるということです。トントンの単調な響きの先に温かい人間を感じる事ができるのです。他人からはかなりオタクな人間に見られているのは否定できませんがこれからも好奇心を失わず、少し背伸びしながらこの素晴らしいKing of Hobbyを楽しんでいこうと思います。

アマ無線・中野さん 受賞

加古川

世界1万局と交信 県内3人目

加古川市野口町長砂の中野仁さん(63)(コールサインJH3EJ)が世界のアマチュア無線局1万局との交信を達成し、「世界1万局よみうりアワード」を受賞した。全国で85人目、県内で3人目という、中野さんは「これまでの活動を記録として残すことができうれしい」と喜んでる。(村山卓也)

よみうりアワード

同アワードは、読売新聞社が1969年に制定。交信相手から集めた交信証をもとに認定する。世界、全日本の2部門があり、それぞれ交信局数ごとに4クラスに分かれるが、世界1万局との交信は最高の栄誉とされる。

中野さんは16歳の時、無線をしていた中学時代の2歳上の先輩に機材を見せてもらったことがきっかけで始めた。「はるか遠くにいる人たちとつながりあえる世界があることに感動した」とのめり込んだ。20歳で会社に就職してからは、帰宅してから深夜ま



交通安全 西脇 成田山
大本山 成田山直系(県内唯一)
西脇市小坂町

ルサインのプレートがついたリュックを背負った男性と出会った。話をするうちに、これまでに何度も交信したことのある相手だったことがわかったという。「思わぬ出会いをもたらしてくれるのが無線の魅力の一つ」と話す。手作りのアンテナで交信した相手は約185か国で

自宅で無線交信する、よみうりアワードを受賞した中野さん(加古川市野口町で)

約2万9000局。相手局が混線していれば、時間帯をずらすなど配慮するルールもあるといい、「無線は相手がいってこそ興味で、若かった自分に人を思いやる心を育んでくれた。受賞は通過点の一つ。生涯続けていきます」と情熱を燃やしている。

この5月に読売新聞の取材を受け、兵庫県のローカル版に掲載されました。